

令和7年度田原本町戦没者追悼式式辞

本日ここに、多数のご遺族、並びにご来賓の皆様のご臨席を仰ぎ、令和7年度田原本町戦没者追悼式を挙げるにあたり、謹んで哀悼の誠^{あいとう まこと}を捧げますとともに、ご遺族の皆様に心から哀惜^{あいせき}の意を表するものであります。

先の大戦が終わりを告げてから、80年の歳月が過ぎ去りました。今、こうして戦没者追悼之標^{しるし}の前に、静かにたたずみますと、はるか異郷の地での熾烈な戦いの中に、あるいは、内地を襲った激しい戦禍^{せんか}の中で、無念にも尊い命を失われた多くの方々のことが偲^{しの}ばれ、悲しみが胸に込み上げてまいります。

ここに、謹んで戦没者の方々のご冥福をお祈り申し上げます。

また、ご遺族の皆様方には、最愛の肉親を失われた後、激動の時代を勇氣と忍耐をもって乗り越えてこられたご努力に対し、心から敬意を表する次第であります。

本年は先の大戦から80年の節目の年であるのみならず、日露戦争終結から120年、日清戦争終結から130年にあたる年でもあります。この間にも、世界各地で戦争や紛争が繰り返されてきました。世界各地にあった生活者の営みや、家族や友人と過ごす住民の日常という静かな秩序は断ち切れ、かけがえのない多くの命が失われてきました。平和とは、二つの戦争の期間の間に介在するだまし合いの時期である、あるいは、戦争の合間の小休止である、などと表現をされることがありますが、これらの言葉は、平和の脆さ^{もろ}への警鐘であり、また、我々に、その「小休止」をいかに永続する「戦後」へと変えていくことができるのか、永続する「平和」へと変えていくことができるのかを問いかけています。

今日、日本は、ご遺族の皆様方をはじめ多くの先人の努力の末に、平和で豊かな社会を築き上げ、国際社会においても、大きな役割を果たすべき国家となりました。国内においては、社会保障や医療制度が確立し、すべての人々が自立して生きることを保障され、お互いが支え合う多様な時代を迎えております。しかしながら、この平和で豊かな社会が未来永劫続くという保証はどこにもありません。閉鎖的な排外主義が幅を利かせ、経済のブロック化が進み、国内においても分断と対立に向かう世界にあって、無心にただひたすらに平和を唱えることのみでは平和は成立し得ません。不断の省察^{せいさつ}と意志ある行為、積極的な努力によってのみ、平和は成立します。故に、我々にはそれを実践する責務があります。

その理念を日常に引き寄せて、住民の皆様すべてが個性を尊重し合いながら、多様な文化や価値観を受け入れ、共に支え合うまちとなるよう、ひいては、より一層、「幸せを感じられるまち」となるよう、我々は最善の努力を尽くす所存であります。そして、この平和の意味、平和の尊さを、歴史の記録にとどめず、人の心の営みとして未来へと紡いでまいります。

「天地の^{あめつち} 神にぞ祈る 朝なぎの 海のごとくに 波立たぬ世を」

朝なぎの海のように波が立たない平和な世が「小休止」で終わることのなきよう、そして戦没者各位の御霊^{みたま}に永久の安らぎと、ご遺族の皆様方をはじめ本日ご参列の皆様方のご健勝を心からご祈念申し上げまして式辞と致します。

令和7年10月31日

田原本町長 高江 啓史